

あとがき

福島秀子、その全貌と友情の発見

当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は12回目を迎える。今回は福島秀子1948－88展である。前回のオマージュ瀧口修造展は「実験工房」をお見せしたが、福島秀子はその実験工房の構成メンバーの一人であり、瀧口修造を師と仰いで、しごとを展開してきた作家である。このたびは、福島秀子の全貌を紹介する初めての展覧会となった。

展覧会カタログのテキストは大岡信さんをお願いし、「福島秀子を発見する」と題するエッセーをご寄稿いただいた。福島秀子のしごとを余すところなくとらえ、作家の人間像に及ぶ心こもった文章で、私は大変うれしくありがたく思っている。

再録のテキストとして、武満徹さんの「弧」(1963年、南画廊カタログ)および瀧口修造先生の「画相のあいだ」(1975年、南天子画廊)を掲載した。前者は作家の「弧」シリーズの作品について、後者は作家の青のシリーズの出発点となった作品について書かれたもので、作家、作品の理解に資するところが大きいと思う。

また、私は「瀧口修造先生と私」と題するエッセー(みすず書房刊、コレクション瀧口修造第5回配本、第8巻月報1991年9月)を再録した。この文章のサブタイトルを——「創美」から「オマージュ瀧口修造展」へ——としたように、瀧口先生と私のかかわりに

ついて、その始りから現在までの経緯を述べたものである。ところで、この文中には瀧口先生の告別式の感動的なシーンが描かれているが、その対象が実は福島秀子さんなのである。私はこの福島秀子展に何やら必然的な予感と因縁めいたコインシデンスを感じていた。つまりこの展覧会の真のプロデューサーは瀧口修造なのだ。

年譜は福島秀子さんと親しい榎本和子さんにお願ひし、詳細な年譜を作成していただいた。これは福島秀子年譜の決定版である。

作品写真はカラーで33点収録したが、福島秀子のしごとの全貌が示されるよう選択、構成した。カタログ編集に当っては榎本和子さんの全面的な協力を得た。

さて、ここで福島秀子さんの現状について報告しておかねばならない。前段の文章をお読みになった注意深い読者は一寸不思議に思われたかもしれない。実は、福島秀子さんは現在、闘病生活を送っておられるのである。昨年10月3日、草月会館で開催された海藤日出男を偲ぶ会の席上、気分が悪くなり、病院で診断の結果、蜘蛛膜下出血と判明した。手術は成功裡に終り、以来8カ月病院で療養生活のあと、ただいまは榎本和子さん宅で静養中である。私の周辺にも蜘蛛膜下出血の事例があり、この病気のむつかしさは十分に承知している。福島秀子さんは見事その危機を乗り越え、ただいまは回復の軌道に乗って徐々に快方に向いつつあると聞く。この展覧会のオープニングパーティに福島

秀子さんの出席が実現したら、私は拍手で迎えることにきめている。

私はこの間の事情を垣間見る機会を持ったのであるが、そこには福島秀子さんの強い精神力、生きる意志の力を感じず。また強運としか言いようのない暗合を感じず。同時に、彼女を支える友人たちの温い心がみえてくる。結局のところ、病気(それは文字通り気の病いである)には人間の温い心が最良の薬であり、最高の医師なのだ。私はつくづくそう思う。

フェニックスのように蘇った福島秀子の今後のしごとに私は期待している。彼女はそこで何を見たか、何を感じたか、いかにして生きエネルギーを得たか、そしてそこから生れてくる作品はいかなるものか、私には極めて興味深いものがある。福島秀子の新作に期待する所以である。

最後に、この展覧会のために種々ご協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。なかんずく、榎本和子さんには終始お世話になった。榎本さんの尽力がなければ、この展覧会の開催は到底不可能であった。深謝申し上げます。

この福島秀子展を背後に廻って、舞台裏をご覧になった方は、そこに榎本和子の姿が次第にみえてきたはずである。かくしてこの展覧会は福島秀子の全貌を示すものであると同時に、福島秀子と榎本和子の友情のあかしを示すものともなった。お二人のご健闘を切に祈る。

1992年6月7日

佐谷画廊 佐谷和彦